The Activity Report of Kanazawa University Museum in 2019

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OKUNO, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061605

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

平成31年・令和元年度金沢大学資料館事業報告

The Activity Report of Kanazawa University Museum in 2019

奥　野　正　幸

金沢大学資料館館長　金沢市角間町　920-1192

Masayuki OKUNO

Director of Kanazawa University Museum, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192, Japan

Abstract

The museum has held 8 exhibitions such as the permanent exhibition, special exhibitions and outreach exhibitions from April 2019 to March 2020 and the total number of the visitors to University Museum exhibition room was 7,250. This number is less than that from April 2018 to March 2019. Because the exposition room closed in March 2020 due to the infectious COVD2019 diseases control measures. However, almost all exhibitions could be held successfully. Especially, 2019 is the 30th anniversary year of the founding of Kanazawa University Museum in 1989. Therefore, the museum held a special exhibition marking the 30th anniversary entitled “The advance for 30 years of Kanazawa University Museum 1989-2019”. This exhibition showed a trace of the exhibitions during these 30 years. The 3 outreach exhibitions were also held at the Intermediateque Tokyo, with the cooperation of the museum, the University of Tokyo, and the Ishikawa museum of natural history, at Kahoku gate in Kanazawa castle park and at the Memorial museum of Ishikawa Forth Higher school and cultural exchange museum.

On the other hand, the University Museum also has large archives of histories for many former schools such as the Fourth Higher School and official documents of Kanazawa University and gave their reference activities. I wish the continuous construction of the archives of the University museum and it will be national Archives of Japan, etc near future.

The Museum staff also have attended to the meetings for the Japanese University Council and the Conference of the Society of Japanese museum sciences at Akita University.

1. はじめに

平成31・令和元年度（以後令和元年度という）の金沢大学資料館（以後資料館と呼ぶ）活動は、資料館設置30周年と年度末の新型コロナウイルスの影響で起伏の激しい1年となった。平成31年2月から令和元年5月12日までJPタワー学術文化総合ミュージアム インターメディアテクで開催された東京大学総合研究博物館・金沢大学資料館・石川県立自然史資料館共催展示を含めると計8回の展示会を開催したが、令和2年2月6日から開催した冬季企画展は新型コロナ・ウイルス感染症のため会期を1週間ほど残したまま資料館を臨時休館とせざるをえなくなり、当初3月末からの開催を予定していた恒例のコレクション展の開催は次年度（令和2年度）に延期を余儀なくされた。その結果、資料館展示室の入館者数は前年度から10%以上減少し7,250人であった。しかしながら、令和元年は平成元年に資料館が設置されて30周年にあたり、資料館にとって非常に特別な年であった。9月には資料館開館30周年を記念して特別展「金沢大学資料館30年の歩み“1989－2019”」を開催し、これまで資料館が開催してきた展覧会の概要について年代を追って紹介した。さらに、8月8日には資料館の累計入館者数10万人を達成することができ、30周年に花を添えた。

他方、上記のような分かりやすい博物館事業の他に、資料館は約88,000点の歴史史料、大学文書資料を保有し、多くの学内外の方々に対するレファレンス活動などの社会貢献を実施した。

また、平成29年度に着任した特任教員は、金沢大学埋蔵文化財調査センターの併任業務をこなしながら、展覧会業務はもちろんのこと、学芸員養成課程の学生の指導を中心に学内教育の担当も行い、さらに対外的な講演会活動を行い資料館の中心的な役割を担っている。

本稿では、令和元年度の資料館活動全般について報告し、年次報告に代わるものとすることを目的とした。

2. 令和元年度の展示・講演会活動の概要

ここでは、令和元年度に行った資料館活動の中で展示活動等について報告する。まず、資料館展示室では、常設展・企画展および特別展を開催し、年間計6回の展覧会を開催した。アウトリーチ展については、はじめにで紹介したように平成30年度から引き続いて、東京丸の内のインターメディアテクにおいて、共催展覧会を開催した他、例年通り金沢城公園河北門での写真展及び石川四高文化記念交流館での企画展を開催した。また、展示会に関連した講演会も開催した。

2-1　資料館常設展示（資料館展示室）

常設展示については、資料館収蔵庫が狭隘であることから、加賀藩校扁額などの大型の展示物や展示室に固定設置された金沢工業高等学校のシャンデリアなどの多くを常に展示している。そのため、収蔵庫に保管している比較的小型の展示物を、時々入れ替えて展示を行っている。なお、一部寄贈や移管により新たに資料館に収蔵された展示物は、「新収蔵品」の展示コーナーを設けて展示を行っている。従って、平成27年度以降大きな展示内容の変更は行っていないので、その詳細については「平成27年度金沢大学資料館活動報告」（文献1）を参照いただきたい。

2-2　東京大学総合研究博物・金沢大学資料館・石川県立自然史資料館共催展 『アートか、サイエンスかー知られざる四高遺産からー』（インターメディアテク；東京）

この展覧会については、平成31年2月16日から令和元年5月12日まで、東京のインターメディアテクにおいて開催され、その間のインターメディアテク全館の入館者数は101,708名（令和元年度入館者数は49,480名）であったが、その展示内容については「平成30年金沢大学資料館事業報告」（文献2）においてすでに紹介したので、詳細についてはこの文献を参照願いたい。また、この展覧会に合わせて平成31年4月26日と令和元年5月10日に講演会が開催された。講演会については、次のセクションで簡単に報告する。

2-3　講演会シリーズ『アートか、サイエンスか』（インターメディアテク；東京）

前述の展覧会『アートか、サイエンスかー知られざる四高遺産からー』の関連イベントとして2回の講演会がインターメディアテクの「ACADEMIA（レクチャーシアター）」において開催された。第1回の講演会は4月26日に、科学技術史研究者であり、東京大学大学院総合文化研究科特任教授であるスヴァンテ・リンドクヴィスト氏を講師に招き開催された。スヴァンテ・リンドクヴィスト氏は、スウェーデン王立化学アカデミー会長を務められている。講演のタイトルは「もしもノーベル芸術賞があったら」で、芸術や音楽などの活動に対するノーベル賞がなぜないのかについて講演された。第2回の講演会は5月10日に、本展示にご協力いただいた、科学史（物理学史）研究者で、金沢大学資料館客員研究員でもある、日本物理学会物理学史資料委員会委員の永平幸雄氏を講師に招き開催された。講演のタイトルは「日本近代化史料としての旧制四高由来の物理実験機器」で、日本最大規模の旧制四高由来の物理実験機器について、これらの実験機器が明治以降の近代科学移入の過程を示す貴重な資料であることや、これらの実験機器から得られる史料的情報を具体的な例を挙げて紹介された。参加者から多くの質問がなされ好評であった。

2-4　春季企画展「金大資料館コレクション展2019：保存と修復　第2章」（資料館展示室）

平成31年3月28日から令和元年6月28日にかけて、「金大資料館コレクション展2019：保存と修復　第2章」が開催された。コレクション展は、平成27年度から毎年開催され5回目の開催であった。今回の展示は、平成30年度の「金大資料館コレクション展2018：保存と修復」の第2弾に位置付け、まず日本で古くから使用されている和紙の修復について、修復のための古糊、打ち刷毛等の道具を「和紙づくり」と「古糊作り」のDVD映像とともに展示した。他方、様々な和紙を自由に触れることができるように展示し、非常に好評であった。また、資料館が所蔵している修復された古地図や医学解剖図資料を未修復の文書資料と合わせて展示した。さらに、和紙に対応してエジプトのパピルスについて現物を展示し、合わせてパピルスの保存・修復の技法について、パネルや写真で解説した。この展示では、和紙の実物を触れるように展示したことが来館者の興味を引きつけた。考古資料の保存と修復に関しては、金属資料についての保存と修復を紹介した。その結果、今回の春季企画展の入館者数は、1,896名を数えた。

図1　金大資料館コレクション展2019：保存と修復 第2章ポスター抜粋

2-5　夏季連携企画展「塩野直道と『緑表紙』：金沢高師第2代校長と伝説の教科書」（資料館展示室）

令和元年7月5日から8月23日にかけて、一般財団法人 理数教育研究所（Rimse）との夏季連携企画展として「塩野直道と『緑表紙』：金沢高師第2代校長と伝説の教科書」を開催した。戦前に編纂された革新的な当時の尋常小学校の「算術」の教科書は、その表紙の色から「緑表紙」と呼ばれ、当時国内外で高い評価を得ていて、現在でも高く評価されている。特に、その平易な説明や図を多用している点は非常に奥深いものがある。教科書を展示するとともに、その中から問題をいくつかピックアップしてパネルを作成し、来館者に解いてもらう工夫をした。また、この教科書は、塩野直道が主導して編集したものである。塩野直道は、後に金沢大学の前身校の一つであり、全国に4校しか設置されなかった高等師範学校の一つである金沢高等師範学校（金沢高師）の第2代の校長に就任している。そこで、金沢高師と金沢高師時代の塩野直道についても紹介した。この展示会には、1,099名の入館者があった。

2-6　ワークショップ「縄文時代のあみもの体験！」（金沢大学附属中央図書館及び資料館展示室）（文献3）

平成30年度に夏休み特別企画として開催し好評を博した考古学ワークショップ「縄文時代のあみもの体験」を令和元年度も、小中学生を対象として8月7日に中央図書館オープンスタジオ及び資料館展示室を会場として開催し、保護者を合わせて65名（内小中学生39名）の参加者があった。参加者は資料館展示室に展示されている資料を見学し、縄文時代の土器に残された編み物の跡について解説を受け、編み物技術を学んだ。その後、会場を中央図書館オープンスタジオに移し、縄文時代の「あじろ編み」の手法を学び、クラフトテープを使ってコースターを作成した。親子で参加された方も多く、様々な色のテープからお気に入りのものを選び真剣にコースターの作成を行っていた。

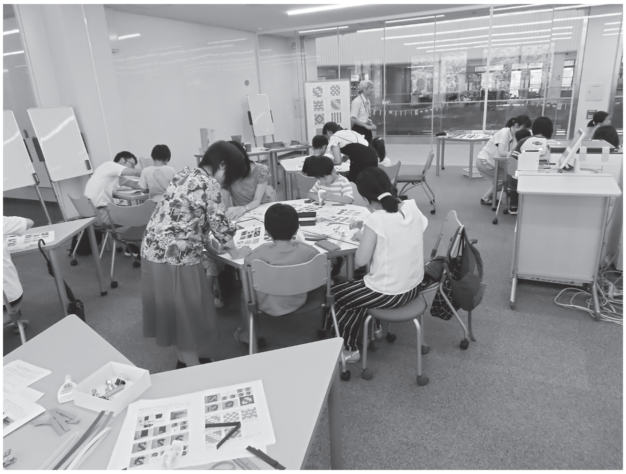

図2　ワークショップ「縄文時代のあみもの体験！」の様子（文献3より）

2-7　東京都主催の「東京　橋と土木展」への橋梁模型の貸し出し

資料館所蔵の東京隅田川に架かる清洲橋の模型とされる「下路吊り橋」模型を、東京都建設局主催の「東京　橋と土木展」（令和元年8月28日～31日に東京新宿駅西口地下広場イベントコーナーにおいて開催）に貸し出した。今回の出展は、平成29年度に続き2回目である。

2-8　特別展「金沢大学資料館30年の歩み“1989－2019”」（資料館展示室）

資料館の開設30周年を記念して、「金沢大学資料館30年の歩み“1989－2019”」と題した特別展を令和元年9月4日から10月28日まで開催し、1,252名の入館者があった。本展覧会では、平成元年に開設された資料館が歩んで来た歴史をこの間に開催された展覧会とその展示資料を展示し紹介した。資料館設置の経緯とその後の歩みを年表で紹介し、これまでの展覧会で展示された主な収蔵品と展覧会のテーマの変遷がわかるようにした。前身校の旧制第四高等学校だけでなく金沢大学の資料も展示することで、資料館言い換えれば金沢大学が常に進化していることを示すことができた。

図3　特別展テレビ取材の様子（文献4より）

3-6　特別講演会「金沢大学資料館30周年記念特別講演会」（中央図書館AV室）

資料館の開設30周年を記念して開催した特別展に合わせて、中央図書館AV室において「金沢大学資料館30周年記念特別講演会」を10月9日に開催した。資料館は、モノ資料の収集・保存・展示を中心とした博物館機能に加え、あまり知られていないが文書館機能を併せ持っている。このような資料館に相応しい講師として、三重県総合博物館長（元京都大学総合博物館館長）の大野照文先生と名古屋大学大学文書資料室（現東海国立大学機構大学文書資料室）の堀田慎一郎先生をお招きし、それぞれ「大学博物館と地域博物館での博物館の役割」、「Nagoya University Archivesの23年 ー機関アーカイブズの視点からー」と題したご講演をいただいた。それぞれ、大学博物館及び大学文書館の重要な役割についてお話しいただいた。なお、参加者数は、41名であった。

2-7　出張写真展「あのころの金沢大学」（金沢城公園河北門）

金沢城公園河北門を会場として、出張展示「あのころの金沢大学」が、令和元年10月18日から11月5日にかけて開催された。河北門での開催は、今回で4回目となった。例年、金沢大学のホームカミングデイの開催に合わせて開催している。前回まで、城内キャンパス中心の写真展を開催してきたが、メインキャンパスが城内にあった頃の金沢大学のその他のキャンパスや金沢市街の様子などの写真も、新たに加えて紹介した。19日間の開催期間中に14,273名もの入場者があり、同窓生を含む多くの市民や観光客の方々にもご覧いただいた。

2-8　金沢大学美術教育専修同窓展「i-Acanthus Ars 2019」（資料館展示室）

恒例となった、金沢大学人間社会学域学校教育学類美術教育専修の学生、教員及び卒業生による作品の展覧会である。会場には、絵画、彫刻、デザイン、写真、工芸などの作品が展示された。令和元年11月1日から8日にかけて開催され204名の方が鑑賞に訪れた。

2-9　学生企画展「いろはー多彩な技術から見る色の世界ー」（資料館展示室）

平成26年度から、毎年「博物館実習」を履修する学生による学生企画展が開催されている。令和元年度は、11月18日から1月28日にかけて開催され、1,178名の入館者があった。学生企画展は、「博物館実習」の館園実習として企画から実際の展示までのすべての学芸員業務を学生自身が行う、全国でもユニークな取り組みである。今回は、色をテーマに資料が持つさまざまな色の中から、赤、青、金の三色を取り上げ、これらの色を持つ資料から特徴的なものを選び展示したものである。色毎にコーナーを設けて、その色を構成する素材・仕組みについて解説をするとともに、パネルの作成や著作権の学習など、多くの課題をこなしていた。また、色をテーマに写真を募集し、来館者によるコンテストも行われた。また、学生自身が展示の解説を行うミュージアムツアーや野菜を材料とした絵の具を作り、しおりを作成するワークショップも開催し、大変好評であった。筆者自身も、例年とは違ったユニークな展示であると感じた。

図4　学生企画展ポスター

2-10　アウトリーチ展「金沢大学資料館の30年 in 四高記念館」（石川四高記念文化交流館）

このアウトリーチ展は、前述の令和元年9月から10月にかけて資料館展示室で開催された特別展「金沢大学資料館30年の歩み“1989－2019”」の展示資料からさらに選りすぐられた資料を、石川四高記念文化交流館でのアウトリーチ展「金沢大学資料館の30年 in 四高記念館」として展示を行った。この30年間、資料館は金沢大学ならびにその前身校の歴史を収蔵している資料展示により学内外に知らせてきた。今回の展示はその成果をまとめて紹介するものであった。この展示会には、31日間で3,559名の入場者があった。

2-11　冬期企画展「財（たから）のまち!?宝町 － 宝町遺跡跡第19次発掘調査速報展」（資料館展示室）

令和2年2月6日から2月28日にかけて、金沢大学埋蔵文化財調査センターとの連携による冬季連携企画展「財（たから）のまち!?宝町 － 宝町遺跡跡第19次発掘調査速報展」を開催した。この発掘調査は金沢大学附属病院の立体駐車場建設工事のために埋蔵文化財調査センターが主体となって、令和元年春から夏にかけて実施されたものである。本展示では、その調査結果が紹介された。この調査地である宝町は近世において与力町であったため、江戸時代の陶磁器のサルやかわらけ（土師質土器皿）などが出土し、それらを含めた調査成果を遺物や写真等を展示し紹介した。この企画展は、当初3月9日まで開催の予定であったが、おりからの新型コロナ・ウイルス感染症への対策として、会期を1週間ほど残したまま、資料館を臨時休館としたため2月28日に終了となった。そのため、期間中の入館者数も379名と例年より少ない結果となった。

2-12　展示協力「NITTAN ART FILE3: 内なる旅～モノに宿された記憶」（苫小牧市美術博物館）

この企画展は、令和元年10月5日から11月24日にかけて開催されたが、苫小牧市美術博物館か

ら、資料館所蔵の剥製標本が被写体となった写真作品を展示したいとの協力依頼があり協力館となった。

3. その他の主な活動等

前章では、資料館の令和元年度展示活動を紹介したが、資料館の活動は資料の収蔵・保存及び展覧会の開催にとどまらない。もう一つの大きな役目として文書館機能を有し活動を行なっているほか、教育・地域貢献など様々な事業を実施している。以下に、令和元年度の展覧会事業以外の主要な活動の概略を報告する。

3-1　公文書の保管と閲覧業務

資料館では、「公文書の管理に関する法律」（以下、公文書管理法と呼ぶ）の施行（平成22年度末）前に移管された第四高等学校等の公文書等の貴重な文書を多数収蔵しており、これらの金沢大学およびその前身校に関する公文書の収集保管閲覧事業（アーカイブス事業）を行っている。令和元年度のこれらの文書資料など（モノ資料を含む）に関する閲覧等の問い合わせへの対応（リファレンス）件数は、41件、文書点数46点、モノ資料点数138点、その他（前身校、大学史、卒業生に関するリファレンス対応6点）であった。なお、資料館は令和元年度末時点で、「国立公文書館等」の指定を受けていない。そのため、貴重な大学史資料が廃棄されることを防ぐために、保存期間が満了した法人文書のうち重要な文書を選別し、学内で一定の手続きを経たうえで、資料館において現用文書として保管を行っている。令和元年度末の受け入れ公文書の総点数は88ファイルである。

3-2　資料の整理・修復

資料館には、令和元年度末の時点で約88,618点の資料（内文書資料11,456点）が収蔵されている。資料の整理作業は継続的に行われており、令和元年度には新たに100点の資料の整理が完了した。令和元年度は、修復事業は実施しなかった。

3-3　令和元年度に移管または寄贈された資料

令和元年度に、移管された資料2件（金沢大学創基150周年記念品一式、ジェーン台風による被害現場写真1点）及び寄贈された資料4件（50点）に上った。その中には金沢大学初代学長と第四高等学校最後の第14代学長の押印のある貴重な卒業証書や、第四高等学校が建設された当時の写真を含む金沢大学の前身校に関係する写真コレクションが含まれる。

3-3　外部資金の獲得

令和元年度の資料館関係者の外部資金の獲得は、2018年からの継続課題であるが、新学術領域研究（研究領域提案型）「中国と日本の先史時代における編物の変遷の比較考古学的研究」が、資料館特任助教の松永篤知氏を研究代表者として採択されている。

3-4　授業等への協力・社会貢献

資料館では、令和元年度は以下のような授業等への協力を行った。

・人文学類の「地域概論」の一コマを担当、資料館の概要説明と展示室及び収蔵庫の見学を実施し

た。（受講者140名、4月18日）

・学芸員養成課程の博物館実習等の授業では、特任助教ならびに副館長が授業を担当したほか、資料館スタッフが資料館の収蔵庫や資料整理などのバックヤードツアーを実施した。また、博物館実習の中心となる学生企画展「いろは－多彩な技術から見る色の世界－」でも資料館スタッフが実習作業の指導補助を行った。

・松永篤知助教を中心として、大学コンソーシアム石川の授業「金沢の歴史と文化」（令和元年9月28日－令和2年2月28日）が開講され、社会人学生7名が受講した。

3-5　情報発信

例年同様に、以下のような情報発信事業を行った。

・『資料館だより』（第59号：5月発行、第60号：9月発行、第61号：1月発行）

資料館だよりは、資料館の広報誌であり、資料館が実施している展示・講演会活動　の開催案内及びその開催報告及び取材報告だけでなく、資料の移管・寄贈の状況などに関する報告を掲載した。また、資料館職員や資料館実習学生の感想なども紹介した。

・「『金沢大学資料館紀要』第15号」（3月発行）

第15号には、平成30年度の博物館実習を企画実施した学生等よる論考「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」、松永特任助教等による『「稲作と中国文明」展における三次元海外遺物レプリカの展示』についての論考及び筆者の平成30年度金沢大学資料館事業報告が掲載されている。

3-6　学会および研修会等参加活動

資料館では、資料館職員の資料館業務に関する知識や技術の向上及び他の博物館・文書館との情報交換を目的として、様々な学会および研修会などへ積極的に参加している。令和元年度の主な参加学会等について、以下に簡単に報告する。

・<u>国立公文書館（東京都千代田区）及び東京外国語大学文書館（東京都府中市）</u>

平成元年6月26日に資料館職員が、今後の資料館所有の文書資料の活用についての情報を収集するため、両館を訪問した。

・<u>全国博物館館長会議</u>

日本博物館協議会・文部科学省・文化庁の共催で令和元年度第26回全国博物館館長会議が、7月3日に文部科学省講堂において開催された。全国の博物館等から400名近くの館長等が出席し、資料館からは館長が出席した。

・<u>大学博物館等協議会第22回大会及び第14回日本博物科学会　秋田大会</u>

大学博物館等協議会第22回大会及び第14回日本博物科学会が令和元年6月27・28日に秋田大学手形キャンパスで開催され、本学からは資料館長他4名が参加した。最初に開催された大学博物館等協議会では、秋田大学鉱業博物館長ならびに秋田大学理事副学長から挨拶があった。続いてシンポジウムが開催され、まず秋田大学鉱業博物館館長から、シンポジウム「地域特性のある資料を通じた博物館・図書館・美術館の連携」について趣旨説明があり、続いて、秋田大学鉱業博物館館長石今井忠男氏の講演「鉱山絵図から読み解く秋田の鉱業史」、秋田大学附属図書館主

査の松山禎広氏の講演「『秋田大学鉱山絵図・絵巻デジタルギャラリー』－作成までの経緯とサイト紹介－」、秋田県立博物館主査の松山　修氏の講演「菅江真澄と鉱山の記録～他館での展示活用について」、及び秋田市立千秋美術館学芸員松尾ゆか氏の講演「秋田の美術と鉱山との関係－秋田蘭画をはじめとして－」があった。引き続き、テーマに関連したディスカッションが行われ、活発な討議・意見交換がなされた。

シンポジウム終了後、大学博物館等協議会館長会議及び日本博物科学会理事会が開催され、次回開催校が九州大学と決定された。また、決算と予算等について原案通り承認された。その他、防災ネットワーク推進会議への今後の出席についても承認された。また、大学博物館等協議会シンポジウムの一般公開についての提案があり、審議の結果承認された。これらの会議と並行して、日本博物科学会のポスター発表（6件）が先行開催された。引き続き大学博物館等協議会及び日本博物科学会の総会が開催された。翌日（6月28日）の日本博物科学会の研究発表会では、19件の口頭発表とポスター発表の後半のコアタイムがあった。資料館からは、松永教員による「特別展「石の博物誌」におけるハンズオン展示とその効果」と題した口頭発表が行われた。また、藤原氏による、「お雇い外国人と石川の近代教育～金沢大学資料館におけるアウトリーチ連携企画展～」と題したポスター発表が行われた。その後、鉱業博物館の見学ツアーがあり、散会となった。

・ICOM京都大会2019（京都国際会議場他）

第25回ICOM（国際博物館会議）が、“Museum as Cultural Hubs: The Future of Tradition”「文化をつなぐミュージアム-伝統を未来へ」をテーマに掲げ、京都国際会議場をメイン会場に令和元年9月1日から7日にかけて大会史上最大の120の国と地域から4,950人の参加者が出席し開催された。資料館からは、筆者と松永特任助教が出席した。9月2日に、秋篠宮ご夫妻が出席され開会式が行われた。その後建築家隈研吾氏による「森の時代」と題した基調講演が行われた。また、9月2日には、写真家セバスチャン・サルガド氏による「アマゾン熱帯雨林保護 －ブラジリアン イニシアティブ－」と題した基調講演が行われ、同氏が撮影したアマゾンの自然と人々をおり混ぜながらアマゾンだけでなく地球の自然保護を訴えるもので、強烈な印象を感じた講演であった。その後のプレナリー・セッションでは、博物館の再定義について活発な議論が交わされ、博物館の重要性を改めて認識した。筆者は、この他ガラス博物館に関するセッションならびにUMAC（大学博物館とコレクションの国際委員会）のセッションに参加した。

・令和元年度石川県博物館協会実務担当者会議

令和元年度石川県博物館協会実務担当者会議は、令和元年12月4日に石川県歴史博物館で開催され、資料館からは藤原氏と菊間氏が出席した。

4. まとめ

令和元年度資料館は、設立30周年を迎えることができた。これは、資料館関係者のみならず、多くの大学関係者及び市民の方々に支えられて得ることができた結果と考えている。更に、令和元年8月には、資料館展示室の累計入場者数10万人を達成することができた。しかしながら、令和2年2月、3月の新型コロナ・ウイルス感染対応のために、資料館展示室への令和元年度の入館者数

は7,250名と平成30年度に比べ約1,000名減少した。しかし、予定していた企画展示ならびに特別展は、無事に実施できた事は幸いであった。特に、特別展ならびに学生企画展は好評であり安堵した。

3回のアウトリーチ展については、金沢城内河北門で開催した大学資料館写真展「あのころの金沢大学」には14,273名、石川四高記念文化交流館で実施した企画展「金沢大学資料館の30年 in 四高記念館」には3,559名の入場者があった。なお、平成30年度から平成元年度にかけて東京のインターメディアテクで開催した、東京大学総合研究博物館及び石川県立自然史資料館との共催企画展「アートか、サイエンスかー知られざる四高遺産からー」についての考察は「平成30年金沢大学資料館事業報告」(文献2) を参照されたい。以上のような、アウトリーチ展ならびに他機関との共催展示会の開催は、資料館や金沢大学について多くの市民の方々や、他大学との今後の連携に貢献し、更に資料館の社会貢献や金沢大学の知名度の向上につながると期待できる。

他方、本稿執筆時点では、金沢大学の公文書の保存につながる、国立公文書館等の指定を受けることができていない。このことは、角間キャンパスへの移転、法人化、学域学類制への教育制度の改編や研究教育に関わる重要な歴史や意思決定のプロセス等を後世に伝える大きな障害になることが危惧される。大学として、教育、研究と並んでその歴史を伝承して行く事が重要であり、今後、文書管理のプロセスを大学全体で再検討し、文書館を設置し目指し続けることを望むものである。

謝辞

本原稿をまとめるにあたって、金沢大学資料館教職員ならびに金沢大学情報部職員の皆様に、様々な情報を確認いただくとともに多くの助言をいただいた。この場を借りて、こころより御礼申し上げる。

引用文献

1、奥野正幸、「平成27年度金沢大学資料館活動報告」、金沢大学資料館紀要、12号、21-29、2017年.
2、奥野正幸、「平成30年度金沢大学資料館活動報告」、金沢大学資料館紀要、15号、31-41、2020年.
3、金沢大学資料館、「小学生を主な対象とした考古学ワークショップ」、金沢大学資料館だより、vol.60、3、2020年.
4、金沢大学資料館、「資料館開設30周年を記念しこれまでの歩みを振り返る特別展を開催」、金沢大学資料館だより、vol.61、1、2020年.